

川口川開門付近
現モール505野
外ステージの辺
り(『むかしの
写真土浦』より)



外西町(土浦専常高等小学校裏)の夕景
小舟を持ち出して家族総出で避難している
(『写真集土浦』(旧職員・市川彰編)より)

土浦の洪水2～明治43年の大水害～(霞ヶ浦その29)

1910(明治43)年の大水害では、大きな被害が出ました。その状況を当時の新聞記事(岩崎宏之(高7回)監修『土浦の洪水記録—先人が語る水とのたたかい—』所収)、土浦中学4年柏原正己(中11回)の友人に宛てた手紙「洪水の模様を報ず」(以下、《柏原》と略記)、同3年高田保(中12回)の「日記」(いずれも1911(明治44)年3月発行『進修第14号』所収)、「学校沿革誌」(以下、《沿革誌》と略記)から再現してみます。敬称略。【 】内は筆者による注記です。

明治43(1910)年の大水害

8月5日頃から梅雨前線による降雨が続いていたところに、11日に房総半島をかすめ太平洋上へ抜けた台風と、14日に沼津付近に上陸し、甲府から群馬県西部を通過した台風とが重なり、関東各地に集中豪雨をもたらしました。利根川、荒川、多摩川水系の広範囲にわたって河川が氾濫し、各地で堤防が決壊。関東地方における被害は、死者769人、行方不明者78人、家屋全壊2,121戸、家屋流出2,796戸に上りました。

土浦の大水害

土浦では、1896(明治29)年に日本鉄道土浦線(後に「海岸線」。現JR常磐線)の土浦と田端間が開業し、1906(明治39)年には、川口川開門と田町川開門とが竣工して、霞ヶ浦からの逆水防線は完成していました。しかし、桜川の氾濫と霞ヶ浦の逆水とが重なって、市街地のほぼ全域が浸水し、明治年間における最大の被害となりました。川口川開門における湖水位が約2.7mとの記録が残されています。浸水家屋は、町の3分の2を超える150余戸に及びました。

7月末以降、《柏原》「當地は土用に入りても冷気を覚え陰雨恰も五月雨の如く新【聞】紙は既に東海道線の不通利根川の増水を報じ人心恟々たる模様にて候ひき……」と、長雨が続き、8月10日には、《沿革誌》「昨夜豪雨雨量86ミリメートルに達す古來稀なり」との大雨となりました。そのため、11日夜半、《柏原》「然し小生は矢張り土佐と同じつもりにて平然と構へ居り候其のうち附近を流るゝ櫻川著しく増水巷々【こうまろ】の半鐘は打ち鳴らされ消防夫は堤防の警戒に餘念なき様子にて候

ひき丁度八月十一日の眞夜中上流坂田の堤防決潰との悲報は土浦町民三萬の耳に悪魔の叫びの如く響き渡り候小生は様子分らず餘り驚きも致さず候へ共呑気に寝て居る譯にもゆかず言はるゝまゝに荷物等取り片付け水を待ち受け居り候明ければ十二日朝まだき滔々【とうとう】たる濁水は廣田を湖に化しつゝ、奔馬の勢にて土浦に推し寄せ立田築地内西町外西町鷹匠町は見る間に一尺位浸水致し候こゝに至りては流石の小生驚かざるを得ず大混雑の後【下宿先から】「真鍋の【中學校寄宿舎に避難致し一先づ胸を撫で下し候……】という状況になり、12日未明には濁水が町内に流れ込み始めました。

その12日の高田の日記には、次のように記されています【高田の家は内西町。現土浦小学校の前にあった。】。「坂田堤防 遂に決潰 萬事遂に休せり、右往左往の人々 更に 繁きを加へ絶望の聲 頻【しきり】なり、床上【ゆかぢ】の材木至る 力杖を得たる心地す 誰も彼も 今は我もなく他もなく 唯 懸命に 床上げにとりかゝる 其間に於て 水に馴れし父一人悠然 洪水を知らざる 妹一人然 而して 嬉々として 悦ぶは 今年十才の弟一人

床上げ終れども 水未だ 襲來の模様なし 家内五人圓庭して、廿九年當時の大洪水を語り聞く 東方白む、鶏の聲、殊更に、耳に響く、人心、漸やく 鎮まらんとす 五時に至るも 至らず 聊か張合のけ抜き感あり 角刈 印判纏【しっぽんてん】の 鋸鋸【のこぎり】のこぎりがなつちなど腰に 往來するも 勇まし 五時半に至る『外西町は水だ』との報

ありし間もなく二里の道程を浸し來れる水は漸やくにして 襲來す 襲來すと見るや 水勢 なかなか 迅くして見る見る 地を浸すこと尺に至り遂に 膝を没するに至りて止む 神龍寺【現文京町にある土浦一中側の寺院。当時の住職は中1回秋元梅峰老師】堂下より 舟を曳き出す

庭池の魚 皆 遁【に】ぐ 好輪【こうりん】釣好きの士は 密かに悦べるならんか 牛十三頭【現土浦小学校校庭付近にあった八木下牛乳店の乳牛】計り 裏の堤【亀城公園の堀の堤】に難を避け來る 新聞不著【着】 他地方の状況 窺ひ知る能はず

床の上に寝る 窮屈の感あり」 12日夕刻には、水の勢いも弱まり、土浦の洪水は小康状態となりましたが、その後、現稲敷郡河内町源清田の利根川の堤防が決壊し、濁流が霞ヶ浦に入り込み、そのため霞ヶ浦からの逆流が土浦の町にも押し寄せ、被害は深刻になってきました。8月15日付の「東京朝日新聞」は、その危機的状況を次のように報じています。

「危険に迫る土浦—十四日夜が死活の境— 茨城県土浦町は十二日午前一時頃櫻川氾濫、中家村上流藤澤村字坂田地先の堤防十四間決壊のため溢水甚だしく、同町三分の二以上千五百餘戸悉く浸水床上二、三尺に及び、一度減水の模様見えしに拘らず、十三日午前に至り源清田堤防破れ大水來襲の報傳はり、同時に東南の風は強雨を誘ひて、光景轉た悽愴を加へるうち、果然十三日夜再び増水し、十四日午後三時上流筑波郡北条町地先において四尺、土浦町錢龜橋にて一尺五寸

を増し、今なほ一時間二寸の割合にて増加し、堤防には亀裂を生じたり。しかのみならず霞ヶ浦の急流盛んに町に侵入しつゝありて、同町の危険言ふばかりなし。もし櫻川の堤防して決壊せんか土浦町は全部浸水を免れざるべく、十四日午後十二時頃は実に同町の死活の境にて民心恟々【きょうきょう】たり。(土浦特電)一

さらに、8月17日付「東京朝日新聞」の記事によれば、16日には

「土浦町いよいよ危険

時々刻々危機に迫りつゝある茨城県新治郡土浦町は、霞ヶ浦の逆流を防ぐべき唯一の閘門、十六日午後二時頃今や僅かに上部二寸五分を餘すに過ぎず、しかして一面櫻川沿岸はますます増水その度を高くし、堤防は僅かに五寸を餘すに過ぎず、もしこの水勢を防止する能はざれば、同町はいかなる惨状を呈すべきや圖り知るべからず。(十六日土浦急電)との状況となり、土浦中学でも《沿革誌》「霞ヶ浦増水の為め土浦町民は本校に避難すべきにより学校長幸津國太郎は附近の職員を召集して其の準備をなす時に午後十時なり」と、避難民受け入れの準備を始めています。

17日午後には、《柏原》「霞ヶ浦の逆流おし寄せ櫻川の堤防は尚ほ決潰せんとし遂に土浦全町危機一髪の間立ちしも消防夫等の非常なる盡力のため災を免れ候ふも逆流は益々其度を増し川口といふ所など軒頭を没せるも有之中學校の艇庫は殆んど水底に沈み候被害民は小學校女學校等に避難の模様にて候ひき」とあるように、霞ヶ浦の逆水が川口川閘門を越水し、櫻川の堤防にも危険が迫りました。しかし、「同町消防隊が櫻川堤防防御として去る十一日よ

り今日迄同處に詰め切り、日夜兼行水防に力を盡くし、且つ同堤防十数箇所延長七百間半ば決壊に傾きたる大破損を修理して、同町全滅の難を救ひたる(8月20日付「東京朝日新聞」)との消防隊の昼夜兼行の奮闘と、越水はしました閘門の効果とによつて、土浦は壊滅的被害を免れることができたのです。しかし、土浦の町の湛水は1ヶ月近く続き、柏原が下宿に戻つたのは30日でした。

《柏原》「八月の終りに至り漸やく減水致し三十日【寄宿舎から】土浦へ歸住致したる次第に候土地の人々は今回の洪水は實に天明年間以來の大水の由申し居り候先は右大略御知らせ申上度如斯に候草々」

町民の洪水対策・「床上げ」

江戸時代以降、洪水に悩まされてきた土浦の人々は、「床上げ」という方法で家財や身を守ってきました。土浦町東崎生まれの渡邊壽恵は、「土浦と水」と題して、1938(昭和13)年の洪水時の様子を記していますが、その中で「床上げ」については、次のように述べています。

「ところで我が家、比較的高所どころかその反対、久松勇氏の話にある極楽田んぼ(両側が蓮田で綺麗に花が咲くところからそう呼んだ。)【現在のモール505北側から鷲宮付近までは湿地帯で水田と蓮田が広がっていた。】に近く、東崎川に架かるお浜橋から昔の小網屋に通じる道筋にあつた。周りは湿地帯で土盛りをしてはあつても屋敷自体はそう高くはなかつた。水害時には土間はおろかすぐ床上浸水となる有様である。我が家の辺りは水害常襲地帯で、長雨時には水が来るものとおさおさ怠りなく備えていた。しかしこの年は予想外の出水、浸

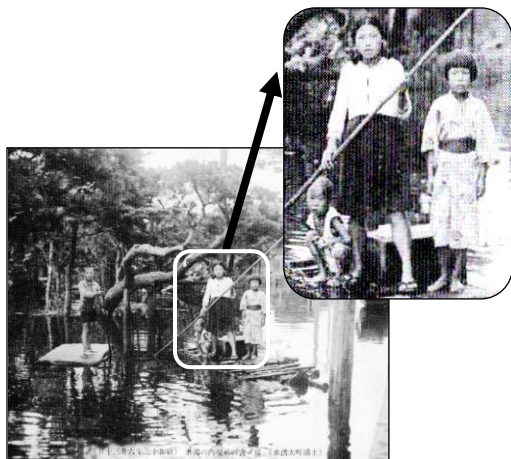
水被災したことは言うまでもないが、全部水に浸かつたわけではない。床上げといつて床の上3尺(約1m)に丸太で櫓を組んで畳や戸、障子、家財道具を上げて水に濡れないようにする。この床上げは近隣処々の家で行われていて、被災記にも何箇所か書かれている(常番のおじさんが「床上げの用意、床上げの用意」と大声で…とか、大水で戸障子や家財道具を持ち出して空っぽになつた家の中でメダカをすくつたなど)。当時の家の造りは大抵柱がむき出し、そこに戸障子をまわして部屋をしつらえるというもので、障子や襖を外せばガラントウ、櫓を組むには格好の状態であつた。農家の我が家には前庭に「おだあし(稲を干す材)小屋」があつて、棟木にする丸太は十分、それを使つて親達で作つた。そこ

に上がつて水から逃れるのであるが、我が家の一行はすぐ近くの東電【東京電力土浦出張所】の2階へ避難した。やや水が引いてからは親達は家に帰つて、櫓の上で過ごしたようである。この「床上げ」は昭和16年の大水の時も行って、13年ほど出水は大きくなかつたのでその上で長いこと生活した記憶がある。出水の恐れがあると床上げの準備をすることはその後何度かあつたようだ。

この「床上げ」は、土浦特有なのか他地方でも行われていたのか私には分からないが、とにかく水害常襲地の土浦ならではの知恵ではなかつたかと思つている。

エピソードを一つ。物置とは別に、燃料にする粗殻を入れておく小屋があつて、掘立小屋であつた。水が押し寄せて軽い粗殻が浮いてしまつたが、そこに鶏が避難して、後日卵が数十個産んであつて、大喜びしたと姉が話していた。

また、左の写真は、近くの鷲宮の境内でのものであるが、畳の筏と流木を組んだ筏に乗るのは私達、兄・二人の姉と私である。畳の兄は6年生、右側の流木の筏の上で屈むのは1年生の私である。絵葉書になつて諸方に広まつていたようである。」



「(土浦町大洪水) 鷲ノ宮神社境内の濁水(昭和十三年六月三十日)」(絵葉書)

庶民の洪水対策は「床上げ」でしたが、金持ちの家では土台を高くしてしました。

「【土浦の町は】蛙がしょんべんしても洪水が出ると言われたぐらいで、ちよつと雨が降ると道路は田んぼのようになるし、家の土間には水がたまる。それで金のある店では自分の土地を上げるために、近くの土地を買つてそれを掘つて、家の土台を高くした。だから当時の金持ちの家というものは他の家と比べると一段高く出来ていたから一目で分かつた。そしてそんな家の裏あたりには必ず池があつた。」(高11回佐賀純一『霞ヶ浦風土記』所収「水郷であつた頃の土浦」高木福三郎の話)